郭沫若研究会報

第8号（総No.9）

目　次

【古代文字研究】

郭沫若の十二支起源研究〔一〕「子」・・・成家徹郎

【エッセー】

九大医学部「成績単」の行方・・・・・・・武　継平

郭沫若と白揚社　・・・・・・・・・・・・藤田梨那

【名作翻訳】

勝利の死　・・・・・・・・・・・・・・・大高順雄

【情報案内】・【編集後記】・・・・・・・・・事務局

日本郭沫若研究会事務局

二〇〇六年五月二十日発行

〒六〇三-八五七七　京都市北区等持院北町五六-一

立命館大学文学部武継平研究室気付

事務局 E-mail: bukeihei@lt.ritsumei.ac.jp

研究会 HP　http://www.ritsumei.ac.jp/~bukeihei/

郭沫若の十二支起源研究〔一〕「子」

成家徹郎

郭沫若は日本に亡命してから中国古代史の研究に没頭した。この時に急に中国古代史の研究を開始することになったその時代背景については本会報第五号「郭沫若の古文字研究（一）」で述べた。彼は研究するに当たってまず、何が信頼できる資料であるか、について考えた。いま存在する、書物となっている文献は、編集や書写の段階で、その時代とそれに関わった人の思想が染み込んでいる。そしてその時代に、価値なしと判断されたものはしばしば排除される。例を一つ挙げる。戦国時代には道家思想の重要な文献である「大一生水篇」が存在した。近年発見された郭店楚簡によって初めてその存在が明らかになった。「大一生水篇」はまさに戦国時代ゆえに出現した思想を伝える一篇で、ここに、大自然のいとなみをよく観察し、よく思索した戦国時代思想家の叡智を見る。（参看 拙作「楚簡大一生水篇とギリシア科学思想」『東方』〇六年一月号 東方書店）ところが始皇帝の全土統一以後は、この一篇は価値の無い文献であると判断されたので、おそらく秦朝期に道家思想が整理編集される段階で排除されてしまった。そして書物のかたちで後世まで伝わることはなかった。

だから郭沫若が中国古代史を研究するに当たって同時代資料である甲骨文と青銅器銘文に着目したのは当然であった。彼は、何の予備知識も無かった甲骨文と金文を古代史研究の主要な資料であると判断しこの時に初めて勉強を始めた。しかも師はいなかった。それにもかかわらず短期間のうちに当時の最高水準に達し、たくさんの著作を出版した。ここにも彼の非凡な資質を見ることができる。

彼は、中国古代史を研究する上で甲骨文と金文は重要な資料であるということでこれらを研究したのである。目的とした著作は『中国古代社会研究』であり一九三〇年一月に上海聯合書店から出版された。この副産物として生まれ出たのが甲骨文と金文に関する研究である。

『甲骨文字研究・序』で彼はこう書いている。

余之研究卜辞、志在探討中国社会之起源、本非拘于文字史地之学、然識字乃一切探討之第一歩、故于此亦不能不有所注意。

また『殷周青銅器銘文研究』の「序」でも冒頭でこう書いている。

余治殷周古文、其目的本在研究中国之古代社会、年来已畧々有所叙録、其関于文字考釈之事者時亦有所弋獲焉。曩歳已成〝甲骨

文釈“一書、専輯考釈甲骨文字者以為一編矣。……。

ここに見える「甲骨文釈」は『中国古代社会研究』の中でも出てくるが、すなわち『甲骨文字研究』である。

研究の主たる目的ではなかったとはいえ、本来この手のものはやはり好みに合っていた、と判断してよいだろう。同じ時期の疑古派の顧頡剛などはこういう分野の研究に進むことは無かった。

一連の古文字研究の専著の最初は『甲骨文字研究』（全二冊。図一）と『殷周青銅器銘文研究』（全二冊。図二）である。『甲骨文字研究』は線装本二冊で上海の大東書局から一九三一年五月に出版された。ただしこの「序」の最後の行は「一九一九年八月一日輟筆」となっている。これは勿論「一九二九年」が正しい。『殷周青銅器銘文研究』もやはり線装本二冊で同じく大東書局から一九三一年六月に出版された。こちらの「序」の最後の行は「一九三〇年七月廿九日沫若」となっている。出版時期はほぼ同時だが、『甲骨文字研究』を書き上げて後、一年後にこれを書き上げたのである。ところでこの『殷周青銅器銘文研究』の形式面で「画期的」なところは、毛筆文字ながら横書きになっているところである。（図二b）これも当時における彼のある種の意気込みを感じさせる一面ではないかと思う。

『甲骨文字研究』の中に「釈支干」という一篇がある。郭沫若はこの中で、十二支はバビロニア天文学の影響を受けて成立したと述べている。この時代、多くの優れた知識人はみな西欧や日本に行ってたくさん吸収しなければならないと考えていた。狭隘な国粋主義は見られなかった。現代の中国人研究者はたいてい、中国古代の文化はすべて今の中国の国境内に起源があって、外国から入ってきたものはない、と主張している。二十世紀の前半は、すぐれた知識人の間に外来文化の影響を否定するかたくなな姿勢は見られなかった。いま中国の古代史研究の学界で「疑古派」は肩身が狭い。こういう状況を考えると、郭氏の「釈支干」を振り返ってみるのは現代的意義があると考える。いま「釈支干」の中から十二支起源に関する研究を紹介する。ただ郭氏は古代天文学の認識が不十分であるので、明らかな間違いが見られる。しかし広い視野をもって探求した姿勢を私は高く評価したい。

干支の起源は非常に古い。殷墟出土の甲骨文の中で最も頻繁に現れる字は干支である。最も古い甲骨文はおよそ紀元前一四〇〇年のものなので、干支は少なくとも今から三千四百年前には出来ていたことになる。

十干十二支に対する古代の呼び名

干支の起源は非常に古いけれども、現在我々が使っている「干支」あるいは「十干」「十二支」という呼び方はそれほど古くな

い。甲骨文の中で十干と十二支は頻繁に現れるけれども、当時これらを何と呼んでいたか、甲骨文の中にその名称は見えない。漢代より古い文献にも干支はもちろんよく出てくるが、その呼び名は一定していない。最も古い呼び名は、春秋時代末期から戦国時代初期（前五世紀）にかけて成立したと考えられる『国語』と『春秋左伝』に見える。『国語』では、十干十二支を「十日十二辰」と呼んでいる。『春秋左伝』では十干を「日之数、十」と呼んでいる。これが漢代の『史記』の中では「十母十二子」と呼ばれている。

郭沫若が「釈支干」の冒頭で述べたように、「干・支」という字が使われたのは後漢時代になってからである。例えば、『白虎通』という書物では「甲乙は幹なり、子丑は枝なり」と記されている。このように後漢時代にはまず樹木の幹と枝にたとえられた。ところが同時代・王充の『論衡』の中で初めて「干」と「支」が出てくる。恐らく「幹」と「枝」が簡略化されて、あるいは抽象化されて「干」「支」が使われるようになったのだろう。そして二千年後の現在まで続いている。つまり十二支の最も古い呼び名は十二辰であり、郭沫若もこれを使用している。

「子」

説文はこう説明している。（図五）

子、十一月、陽気うごき万物しげる。人は五爵の一つとして子を用いる。（成家注：「人」字、宋本は「入」字につくる）象形。すべて子の属はみな子に従う。（李陽冰いわく、子字は、むつきの中にあって足を合わせているさま。）[子]は古文の子、巛に従う。巛は髪の象形なり。[子]は籀文の子、囟に髪あり。臂脛は机上にあり。

郭沫若の説

卜辞は十二辰六番目の「巳」を「子」字につくる（図四）。ところが十二辰の一番目は図三のごとくつくる。金文の「辛巳」「癸巳」「乙巳」「丁巳」これらの「巳」はまたみな「子」（図四）につくる。ところが召伯虎簋（六年琱生簋）銘文「四月甲子」の「子」は図七のようにつくり、傳卣銘文「唯五月既望甲子」の「子」は図三金文cにつくる。

羅振玉はこう述べた。甲骨文の十二辰第一の「子」と、説文に収録される籀文の字形は頗る近い。ただ両臂及び机が無いのみ。召伯虎簋の銘文は臂があるが机（几）が無い。卜辞とほぼ同じ。ただ甲骨文の字形（図三甲骨文）は古代金文に見えない。おそらく、簡略にした字形であろう。

郭沫若おもう、傳卣銘文の字形（図三金文c）は説文の籀文と極めて似ている。ただ字形の下の部分、傳卣は机が無い。しかし

両者ともに両脛はある。おそらく、臂脛の外は衣服を表しているのだろう。許慎の書はこれが少し誤って伝えられたものと思う。

要するに、説文籀文[子](図五)と篆文（説文の見出し字）は最初のころは判然とそれぞれ別の字であった。籀文の字形は十二辰の第一字としてのみ用いられる。それ以外の用例は無い。これは卜辞が発見されてから、明らかになった新事実である。また、考えてみる価値のある新たな問題とも言える。なぜ二つの字形があるのであろう。

古代の「子」と「巳」の関係

漢字の初期における「子」と「巳」の関係はかなり複雑である。これに関連する伝承が文献に見える。紀元前六世紀、子産という人物の語る古い伝説が『春秋左伝』に記録されている。

昔、高辛氏に二人の男の子があり、上を閼伯（アッパク）、下を実沈（ジッチン）といって、曠林に住んでいたが、互いに仲がよくなくて、毎日のように武器を手にして攻め合っていた。帝堯はこれを心よからず思われ、閼伯を商丘（河南省の地名）に遷して、辰星（大火）を祀らしめました。のち、商族がこの地に住んで栄えたので辰星は商の星となりました。一方、実沈は大夏（太原）に遷して、参星（オリオン）を祀らしめました。のち唐の人がこの地に住み、夏・商の両王朝に仕えてきました。その末代が唐叔虞という方。周の武王の妃・邑姜が大叔をみごもっておられた折、夢に天帝が現われて、「汝が産む子に吾は虞と命名する。唐の地を与え、参星をそれにつけて、子孫を繁育させてやろう」と邑姜に仰せられた。その子が生まれると、その掌紋が「虞」になっている。そこで虞と名づけられたが、やがて成王が唐を滅ぼすと、大叔を唐の地に封ぜられた。（これが晋の開祖に当たる唐叔虞で）こういう事情がありますので参星は晋の星となりました。こうした由来を辿れば、実沈というのは参星の神であります。

『春秋左伝』に見える伝説によれば、商の遠祖閼伯は大火（アンタレス）を祀った。そこで大火は商星とも呼ばれる。十二辰第一「子」字の甲骨文の字形（図三甲骨文b）、これはサソリの象形である。紀元前二千年紀メソポタミアのアッシュルバニパル・テキストによればさそり座α星はNabu神を表す。Nabuと閼伯は音が近い。また中国の文献では、「子」に当たる歳名は「困敦」であると伝えられている。「困敦」の古代の発音は、メソポタミアの「星表」に見えるサソリの意味のGIR.TABと音が近い。

黄道十二宮と獣帯十二星座

郭沫若は、十二辰はバビロニアの黄道十二宮に由来すると考えた。ここで十二宮について説明しておこう。黄道十二宮は、いま巷ではやっているホロスコープの起源である。黄道とは天球上で、

太陽の通る道である。また惑星もほぼこの黄道に沿って移動する。そこで黄道付近の星はずっと昔から注目されてきた。そして黄道付近の星座に、メソポタミアでは主に動物を当てた。（図八）動物が黄道に沿って帯のごとくつらなっているので一般に「獣帯」と呼ばれる。獣帯は「おひつじ座」から始まって全部で十二ある。獣帯の各星座は広がりは一様ではない。しかし占星術に使う十二宮は、実用の都合上みな均一になった。そうすると三六〇度を十二で割って各三十度になる。一周はなぜ三六〇度か？バビロニアでは六十進法が使われていた。六十は割り算には非常に都合がよい数である。バビロニアでは割り算ないしは分数計算を好んだ。そこで一周を、六十の六倍かつ一年の日数に近い三六〇とした。バビロニアの六十進法はその後もずっと使われてきて、現代では時間の表示に使われている。獣帯が成立した時期は、春分点はおひつじ座にあった。そこで獣帯十二星座の第一はおひつじ座なのである。ところが、天体の運動で「歳差」という現象がある。これは地球の自転軸の向きが固定していないために起こる現象である。地球の自転軸が円運動しているので、地球から見た場合、星の位置も変わってくる。例えば、よく知られている北極星は、数千年前は北極の位置にはなかった。地球の公転軌道と赤道面の交点であるところの春分点も歳差の影響で黄道上を移動する。ただ移動の速さは、一年で角度のおよそ五十秒であるから、百年二百年ではこの現象を実感することはできない。ところで占星術で使う十二星座は、実際の天体位置の変化とは無関係に（いちいち天体を観測するのはやっかいなので）、春分点を基準として各三十度に等分して使用されてきた。そして一千年以上経ったとき、おひつじ座は春分点から離れてしまった。（図九）このように、かつての獣帯十二星座はみな、占星術で使われる十二星座とずれてしまった。そこで両者を区別するために、占星術で使う十二星座に対しては「宮」という語を使うようになった。だからホロスコープで使う方は十二宮といい、順に「白羊宮」「金牛宮」などと呼ぶ。そしてこれらに対して記号がよく使われる。図九の外側の円に見える記号がそれである。ここで、「白羊宮」の記号が甲骨文の「羊」に似ているところが面白い。

郭沫若の考察によれば天上の十二支はバビロニアの獣帯十二星座（この時期は十二宮と同じ）の影響で成立したもので、次のように対応する。

十二支	獣帯十二星座	二十八宿
寅	乙女	角
卯	獅子	軒轅（二十八宿以外の星座）
辰	蟹	輿鬼

巳　双子　東井
午　牡牛　畢、昴
未　牡羊　胃、婁
申　魚　奎
酉　水瓶　危、虚、女
戌　山羊　牛
亥　射手　斗
子　蝎　尾、心、房
丑　天秤　氐、亢

羅振玉は、甲骨文金文の「巳」字がどうして「子」字のように書かれるのか、まったく分からない、と言った。しかし郭沫若の考察によれば、天上の十二辰ではバビロニアの「ふたご座」に当たる。この影響で「子」字を使うようになった。

ところで古い文献によれば、商族の遠祖は契という人物である。だから、契と閼伯は同一人物であるに違いない。契はまた偰とも書かれる。説文はこう説明している。（図十）

偰：高辛氏の子であり、堯の時代の司徒であり、殷の先祖である。この字はまた禼の字形に書かれることもある。この字について説文はこう説明している。（図十一）

禼：虫の象形である。読みは偰と同じ。

許慎はこの説明の下に古文の字形を収録している。この古文の字形は説文に見える「子」の籀文の字形と実によく似ているではないか。これはきっと「萬」字（金文の字形、図十二ａｂ。説文、図十三）の変形の一つに違いない。また説文にはこれと似たもう一つの字形が収録されている。それは「萬」の下部が「虫」に代わっている字形であり（図十四）、許慎は「毒虫なり」と説明している。これはまさにサソリそのものの象形である。金文の中の数を表す千萬の萬は多くこの字形につくる。だから「萬」と、下部が虫の[萬]（図十四）はもとは一字である。とくにその長い足の字形（図十二ｃｄ）はすなわち説文の「萬の下部が虫の字形」で、説文はそれぞれ別の字として収録している。以上によって「偰」（禼）の古文の字形と[萬]もまたもとは一字であったと見ることができる。

以上によって次のことが分かる。契は商族の遠祖であり、そして閼伯である。中国古代の商星はもとはサソリの星座に由来する。契（偰）のもとの名は、説文に見える古い字形（図十一）や金文「萬」であって、それはすなわちサソリの象形である。そこで子孫はこの字を使うことを避けて、契や偰を使った。こういう字を使ったわけは、商族の後人は、先祖が甲骨に字を契刻（「契」は「きざむ」の意味がある）していたことを知っていたからである。

「子」の籀文の字形もまた偰の古い字形や金文「萬」の変化した字形である。ただ毒虫であるので、使用を避けるようになったのであろう。

閼伯が契であり、至上神・高辛氏の子であるので、サソリの象形を変えて、人形（じんけい）とした。殷人は「子」字を姓とした。甲骨文「子」はサソリの図である。古代民族の姓はたいていその民族のトーテムを使用する。殷人は偰を遠祖としたというから、サソリ（籀文「子」、金文の「萬」）をトーテムとしていたことである。

図1.『甲骨文字研究』書影　大東書局 1931.5

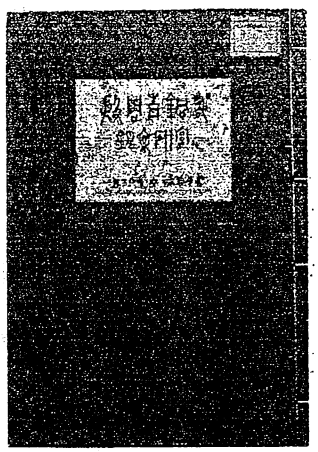


図2. a.『殷周青銅器銘文研究』上冊表紙　大東書局 1931.6

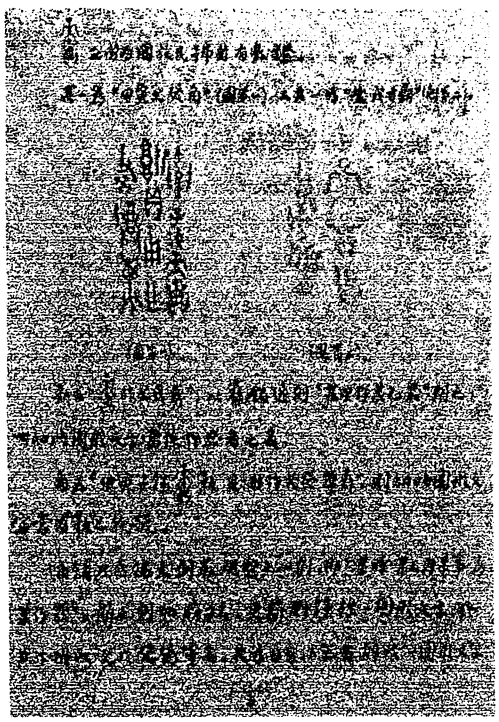


図2. b. 毛筆文字ながら横書きであるところが「画期的」

図3. 十二支の第一字「子」

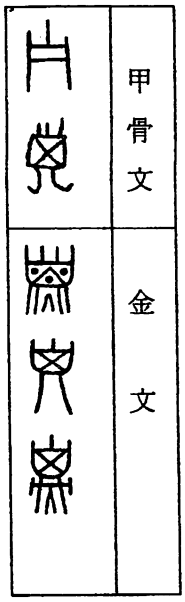


図4. 十二支の第六字「巳」

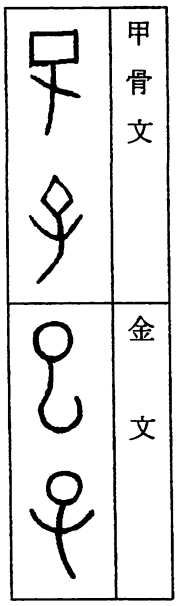


図5. 『説文解字』の「子」

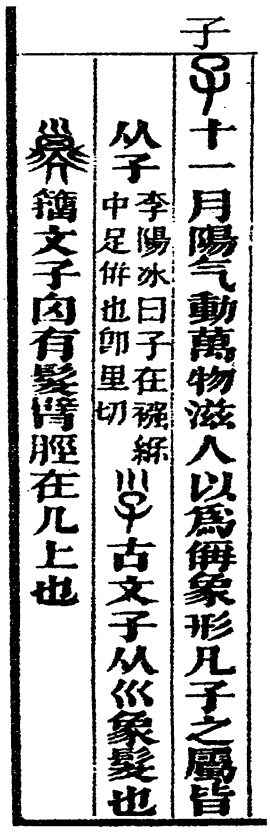


図6. 『説文解字』の「巳」

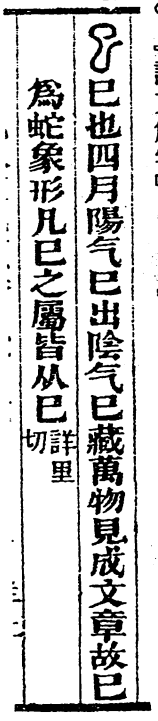


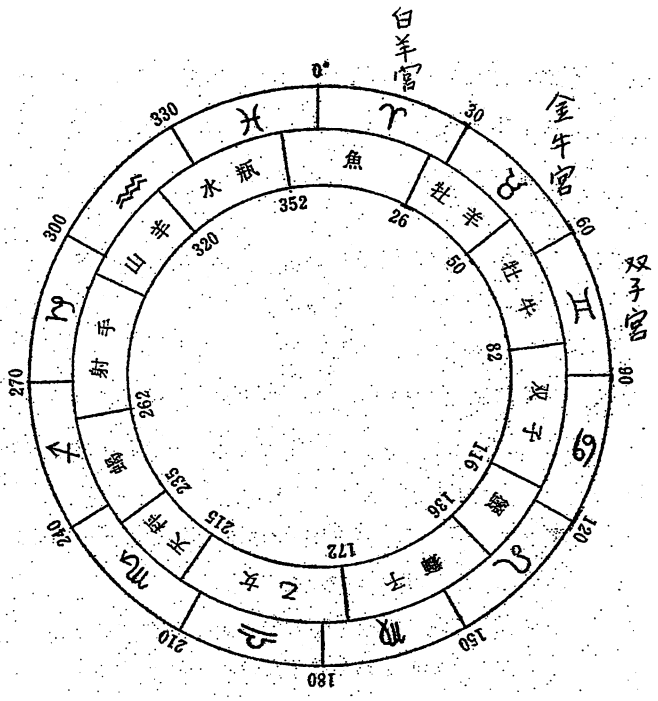
図7. 召伯虎簋（六年琱生簋）銘文

釈文（第一行）唯六年四月甲子

図8. バビロニアの界標に見える「サソリ・太陽・月」
紀元前一一〇〇〇年ころのものと見られている。

Science Awakening 2,New York 1974

図9. 黄道獣帯・十二宮図



荒木俊馬『西洋占星術』恒星社厚生閣 1963

図10 『説文解字』の「偰」

図11 『説文解字』の「离」

図12 金文の「萬」

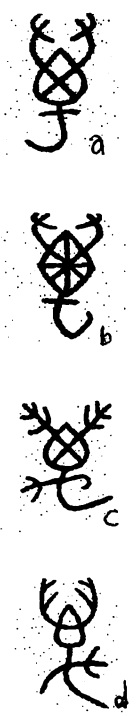


図13 『説文解字』の「萬」

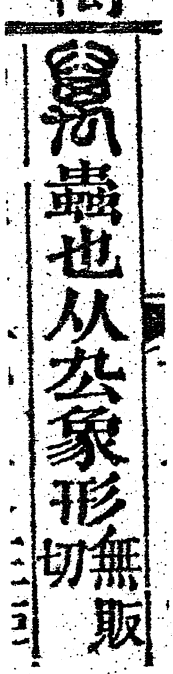


図14 『説文解字』の「萬＋虫」

九大医学部「成績単」の行方

武　継平

いままでぼくが見たことのある日本留学時の郭沫若の成績簿は六高のものしかなかった。八八年十一月四川大学出版社から出た『郭沫若佚文集（下）』に収録された「日本第六高等学校卒業生名簿」と「日本第六高等学校成績単」が最初に公表されたものだった。前者は中国の「大高同学録」にも見られるが、後者は岡山大学から出たとしか考えられない。七年後名和悦子氏は六高における郭沫若の留学生活の実態を調査し、その成果を『中国研究月報』（95年8月号）に発表した。六高時代の郭沫若の資料を補完したといっても過言ではなかろう。

九大博士課程にいた頃、ぼくも大正時代の郭沫若一家の住民登録の内容を調査したことがある。福岡市役所、東区役所戸籍課の窓口で何度粘っても受理されなかった。役所の説明には納得せざるを得ないものがある。住民登録の記載内容は登録者本人またはその家族以外の人には調べる権利がない。たとい非営利的な目的の研究調査であってもだ。子孫ならいいらしいが、血縁関係を証明する書類が必要だ、ということだった。

九大医学部にある郭沫若関係資料の調査に関しては、内部の人間だから利便は図りやすいだろうと思ったが、実際はそうではなかった。これもまた博士課程時代のことだったが、ぼくは関係部門に資料調査の許可願いを何度も文書で提出しても無視され、直接窓口に足を運んでいっても、許可が出たらこちらから連絡するといっていつまで経っても返事がこない。

こうして資料調査は行き詰まった。何か打開策はないかと思って、指導教官の力を借りることにした。おかげで平成九年五月に、「九州大学医学部郭沫若資料調査会」が立ち上げられ、しかも九大総長に直願したおかげか、医学部から「特別許可」がおりた。

ところが、調査の結果は予想より悪かった。医学部学生課の管理下にある埃だらけで薄暗い倉庫の中で、われわれは大正七年度医科大学の「入学願書綴り」を見つけ、中には当時の九州帝国大学医科大学に大正七年八月一日付で提出された入学願書と履歴書はあったが、福岡在留時の現住所および家族に関する情報の記載があると思われる「学籍簿」は見当たらず、期待していた成績記録も結局発見できなかった。

郭沫若らが留学していた頃、民国の留学生が日本人妻を娶り、勉学に励みつつ家庭生活を営んで行くケースは決して珍しくはなかった。しかし、郭沫若は事情が違っていた。岡山六高時代か

ら九大医学部を卒業するまで佐藤おトミと熱愛、そして同棲し、しかも和生、博生、佛生の三子の父となってもずっと故郷の妻張瓊華と離婚しなかった。六高にいた頃は長男の和生はまだ赤ん坊だし、外出を控えればばれずにすんだかもしれなかったが、箱崎海岸に住んでいた頃は医学部の裏門のすぐ側だし、子は三人に増えた上に時々病気の子を医学部付属病院に連れて行って学生の家族なら医療費が免除できる診察と治療をよく受けていた。子供たちとの親子関係はむろん、佐藤おトミとの夫婦関係も大学に隠し通せるわけがなかったはずだ。ならば、当時彼は自分の事実上の「重婚」を大学側にどう説明したのかは非常に興味ある問題となってくる。『創造十年』などではまったく触れられていないことだが、個人情報が記載される学籍簿や住民表のようなものの写しを入手すれば、裏づけは簡単に取れる。

調査中、「学籍簿」が入学年度別に分けて綴られていることがわかった。ところが、不思議なことに、大正八年以降の医学部「学籍原簿」が倉庫の片隅に山積みされているものの、郭沫若が入学した大正七年の一冊だけはどうしても見つからなかった……。

一年後、ぼくは中国郭沫若研究会編『郭沫若研究』（八）p260にある次の記述を目にした。

「応日本学术振兴会邀请，中国社会科学院郭沫若著作编委会郭沫若研究学者代表团一行四人，于一九八九年五月二四至六月一四日访问了日本东京、京都、冈山、福冈等地。……代表团在日本得到各界朋友的热情帮助，收集了一批郭沫若在日本时期的资料，主要是在冈山六高和九州帝大留学时的有关资料。」

六高時代の成績表が八八年十一月にはもはや中国で公表されたのだから、翌年六月までは、岡山大学で眠っていた郭沫若の資料は少なくとも二度中国のお客さんによって掘り起こされ、そして九大医学部にも、われわれ「調査会」より早く足を踏み入れる先客がいた。

八九年中国の学者が来訪した際同伴した九大の関係者に電話して分かったことだが、医学部で郭沫若の「学籍簿」を見たという。話によると、それが分厚い綴りになっている「学籍原簿」にある数ページで、中国のお客さんはそのコピーを持ち帰った、ということだった。

ぼくは再び医学部学生課に行った。担当者は、八九年の倉庫管理係りはとっくに異動したし、現に半日探しても出てこないなら、当時お客さんが帰った後資料は倉庫に戻されず、どこかに放置され、後日ゴミとして捨てられた可能性は排除できないという。確かに八十年前の古い資料だし、だれかに必要でなければ何の役にも立たぬ古紙の山にすぎないが、その管理のずさんさにはあきれ

たものだ。

あれから数ヵ月後、九大医学部学生課は元の古い建物から引越した。要らぬものは処分すると聞いているから、おそらく明治大正期の学生資料はもう永遠に見られないだろう。なんだか一抹の寂しさを感じずにはいられないが、郭沫若の資料のコピーが中国に持ち帰られたことを思い出すとまだまだ希望は捨ててはならんと自分に言い聞かせた。

〇三年ぼくは中国郭研会との交流を機に八九年の訪日に参加したH氏に近づくチャンスを得た。それで例の資料のコピーは最終的には郭沫若記念館資料室に納められたことがわかった。北京前海西街十八号にある郭沫若記念館は二度見学したことがあるから、その資料室は内部の人間しか利用できないことも勿論よく知っている。こうしてぼくは何年も追いつづけた幻の史料の所在を突き止めた興奮と、この目で見ることができない悔しさが入り交ざった複雑な気持ちで北京を立った。

昨年の夏、青島大学で開催された「郭沫若與中国知識人在民族解放戦争中的文化選択国際シンポジウム」に出席し、帰りの飛行機の中で友人からもらった新刊図書『文化越境的行旅——郭沫若在日二十年』（文化芸術出版社 2005.3）をなにげなくぱらぱらとめくっていたら、七一ページにある写真らしきものと下にある「郭沫若在九州帝国大学的成績単」の文字に目を見張らずにいられなかった。なぜなら、その成績表の記載内容はぼくの記憶にある六高時代の郭の成績表の内容とそっくりだからだ。写真には学校名が見当たらないので何ともいえないが、正直まさかと思った。

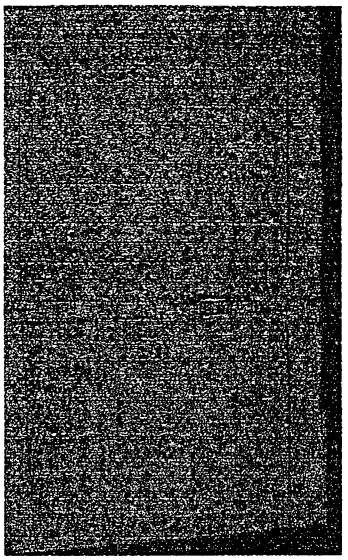
その晩、自分が疑ったことを資料で確認した後、北京の友人に電話して単刀直入に聞いた。本当に「郭沫若在九州帝国大学的成績単」を持っているのか、と。返事は「もちろん」だった。指摘を受けた友人は電話で「あれっ」と言洩らした。後日釈明してくれたが、どうやら出版社のミスで、版下を組む際二枚の画像資料を間違えられたらしい。

そのとき、ぼくには一つの考えが浮かんだ。そして友人に、その「成績単」をまずこちらの日本郭沫若研究会報で公開しないかと誘った。

友人はさすが器が大きい。いいよ、お前にやると快諾してくれた。おかげで今号の会報で公開することができたのである。

この「成績単」を見て、九大大先輩の郭沫若に対する敬意がおのずと湧き起こってきた。思うに、故郷から遠く離れた異国の日本で一人分の国費で家族五人を養わねばならぬ苦学生活を幾年も強いられた彼は、国を愛し、文学を愛するために医学の道を断念しようと何度も思った。しかしそれでも最終的には日本の帝国

大学医学部が定めたすべての科目を修了したのみならず、すべての試験にも合格し、そして九州帝国大学医学士として立派に卒業したのである。彼は医者になれたのになろうとしなかったが、決して好きではない医学の勉強を最後まで放棄しなかった彼の努力は、献身的な「糟糠の妻」である佐藤おトミに対する一種の恩返しである以外にないものでもない、とぼくは強く感じた。



（写真提供：蔡震）

郭沫若と白揚社

藤田梨那

郭沫若は日本亡命中に言論、発表からプライベートの面にわたり、かなり厳しい制限を強いられていた。この時期文学作品が少ないのもこのためである。にもかかわらず、彼は政治的圧力に屈せず、多くの仕事をした。古代社会史研究、古代文字研究、自伝などがそうである。小説ではわずか数編の身辺小説も書き残した。亡命期の彼の生活、行動については、目下彼の自伝『創造十年』『続創造十年』「東海を跨って」「私は中国人」、書簡、身辺小説からある程度伺い知ることができる。しかし尚多くのなぞが残されている。満州事変後日本政府が強化した政治統制の状況下において、郭沫若は亡命者として社会的活動を自粛し、常に警戒しながら生活していた。しかし革命家として、社会洞察や革命行動の模索を続けていた。最近いくつかの調査がこの辺の状況を少しずつ明らかにしてきた。

昨年八月北京で開催された「東亜現代文学における戦争と歴史記憶国際学術会議」で、私は「郭沫若亡命期の抵抗文学」と題する論文を発表した。作品としては自伝、古代史研究と身辺小説「鶏の帰去来」を取り扱った。特にこの「鶏の帰去来」を調べる中で気づいたことがある。この作品は実に小さな出来事を描く。しかし身辺小説の形を取りながら、その実は在日朝鮮人労働者の問題を取り上げている。私はこの作品を変形した抵抗作品と呼んだ。

ご承知のように、日韓併合（1910 年）後、日本政府は朝鮮半

島で執行した一連の土地政策によって、多くの朝鮮農民を破産に追い込んで、大量の流動人口を作ってしまった。関東大震災後、東京の復興工事のため政府が朝鮮から大量の労働者を強制連行し、日本で働かせた。しかし復興工事の完了（1930 年）はまた朝鮮人労働者の失業問題を引き起こした。この問題は第二次世界大戦前日本を襲った経済不況、日本人労働者の失業と重なり、大きな社会問題となった。郭沫若は「鶏の帰去来」で、朝鮮人労働者の労働状況、賃金、食事について細かく描いている。作品は彼独特なロマンチックな潤色がある一方、かなり客観的な調査、データを踏まえた部分もあった。そのデータはどこから取ったのか、これが一つの問題であった。

郭沫若が亡命した時代（30 年代）、日本で発表された朝鮮人労働者問題の論文、報告を調べ、その中に在日朝鮮人の論文が数編あった。金民友の『朝鮮問題』、金重政の「在日本朝鮮労働者の現状」、李北満の「朝鮮における土地所有形態の変遷」、李清源の『朝鮮社会史読本』などである。このうち郭沫若が特に参考にしたと思われるのは李北満の論文である。李北満の「朝鮮における土地所有形態の変遷」は雑誌「歴史科学」（1932 年）に掲載されている。出版元は白揚社である。しかももう一つの著書、李清源の『朝鮮社会史読本』も白揚社からの出版である。そこで、白揚社とはどんな出版社か、郭沫若と白揚社はどんな関係があったのか、興味深い問題が出てきた。

白揚社は大正五年東京神田に創立し、昭和初期の社長は中村徳次郎。歴史や社会研究の著書の出版を多く手掛けていた。昭和八年五月より雑誌「歴史科学」を発行。この雑誌は発刊当初からプロレタリア的色彩を帯びていた。主要執筆メンバーには、相川春喜、久保栄、佐野袈裟美、田村栄太郎、鈴木安蔵、徳永直、服部之総、八田元夫、早川二郎がいた。李北満も雑誌の初期に数回執筆している。「歴史科学」はプロレタリア社会運動家たちの一つの拠点になっていたようである。李北満の「朝鮮における土地所有形態の変遷」は「歴史科学」の一九三二年八月号に掲載された。郭沫若の「鶏の帰去来」はその翌年に書かれる。

郭沫若と白揚社の関係は、郭沫若が文求堂主人田中慶太郎に宛てた書簡を通して、ある程度推測できる。最近斉藤孝治氏が長大な郭沫若伝記『シュウルム　ウント　ドランク』を上梓した。その中で郭沫若と白揚社の関係について詳しく触れている。それによると、郭沫若は佐野袈裟美、渡部義通の紹介で白揚社に出入りするようになった。白揚社は郭の『中国古代社会研究』の日本語版を出そうと申し込んだ。郭はこれを了承した。しかし後に版権などの問題で出版は実現しなかった。先払いの印税を返還するた

め、郭は自分の歴史短編を翻訳し、「歴史科学」に掲載した。この経緯は田中慶太郎宛書簡にも見られるものである。

郭沫若と白揚社の関係は恐らく三二年、雑誌「歴史科学」発刊の頃から始まったと思われる。『中国古代社会研究』について、すでに三三年五月号の「歴史科学」で、『日本歴史読本』の著者早川二郎が批評を発表している。郭沫若の「秦始皇の死」は三六年二月第五巻二号に、「項羽の自殺」は九月第五巻九号にそれぞれ掲載されている。このようなことから、郭沫若は「歴史科学」を発刊時から読んでいた可能性が高いと言える。郭沫若と白揚社の関係について私が注目した点は、当時地下に潜入していた日本や朝鮮のプロレタリア社会運動家と郭沫若との接点がここに見え隠れしている、と言うところである。

李北満と李清源について、新潟国際情報大学教授広瀬貞三氏は「李清源の政治活動と朝鮮史研究」（2004年「新潟国際情報大学情報文化学部紀要」第7号）に詳しい調査を報告している。それによると、李北満は二二年に来日し、朝鮮プロレタリア芸術同盟の創立に参与した。三二年に植民地研究グループを作って、もっぱら「朝鮮の農業問題」を研究した。李清源は二九年に来日、「在日朝鮮労働総同盟」、日本プロレタリア文化連盟に参加。朝鮮の農民問題を研究した。三六年に『朝鮮社会史読本』を白揚社から出版した。東京アジア・アフリカ図書館にある郭沫若文庫に李清源のこの著書が入っている。どのような経緯で李清源の本を入手したか、調査を俟たなければならない。ともかく、郭沫若と白揚社の関係は彼が日本及び在日朝鮮人プロレタリア運動家たちに注目したことを物語っている。今後この方面の研究に重要な手がかりになる、と考える。

勝利の死①

郭沫若　原作　大高順雄　訳

テレンス・マック・スイニ②はアイルランド独立軍の隊長、シン・フェーイン③党員として活躍、一九二〇年八月中旬にイングランド政府に逮捕されて以来、ブリックストン④刑務所に投獄され、イングランドの食を取ることを恥じ、七十三日の断食の後、十月二十五日終に獄死した。

その一

愛国者テル⑤とバノックバーン⑥のブルース⑦よ、
おお、再び自由の旗の下に生き返り給え。

——トマス・キャンベル⑧

ああ、この「涙の海」の写真よ、
厳しく陰気な高い建物 ― それは監獄の門前か、教会の外面か。
一群の数え切れない子らがちょうど跪いて祈っている。
「アイルランド独立軍の隊長マック・スィニがイングランドの
ブリックストン監獄に投じられてから、もう五十余日が経った。
彼は入獄以来、恥じてイングランドの食を取らない。
アイルランドの子ら、高い建物の前に跪く子らは
彼の愛国的至誠に感謝して
彼のために加護を求めつつ祈る。」
敬すべきマック・スウィニよ、
愛すべきアイルランドの子よ。
自由の神はきっと汝らを護ってくれるだろう。
汝らは互いに加護し得るから、
汝らは自由の神の化身だから。

十月十三日

その二

希望が暫時世界と訣別した、
自由は再び悲鳴を上げた、コシュスコ⑨が死んだ時。

——トマス・キャンベル

アイルランドの志士マック・スィニよ、
今日は十月二十二日だ。
（私の壁の暦がこんなに私の注意を惹くことはなかった。）
あなたはまだブリックストンの刑務所に囚われたまま生きていますか。
十月十七日ロンドンから来た電報によれば、
あなたが断食してからもう六十六日が経った、
しかし健康状態は良好である、
十七日午後には奥さんと瞬時しか話せなかった、
しかし顔色は前より輝きを増した一方、
身体は日々に衰えたとのことだ。
しかし今日は十月二十二日だ。
アイルランドの志士マック・スィニよ、
この時刻の有機物体中にあなたの生命はまだ存在していますか。
十月十七日あなたの故郷 ―コーク⑩市― から来た電報によれば、
シン・フェーイン党員の一人フィツシェルド⑪が、
コーク市の監獄に囚われ、断食してからもう六十八日が経ち、
終に十七日の夕刻、突然昏睡状態に陥り長逝した、とある。
ああ、有史以来稀に見る哀烈の惨死だ。

アイルランドの首陽山よ[12]、アイルランドの伯夷と叔斉[13]よ、
今日以後に来る電報を私は読み得るかどうか疑わしい。十月二十二日

その三

おお、神聖な真理よ、汝の凱旋は暫く止んだ、
汝の妹、希望も汝と共に微笑むのを止めた。

——トマス・キャンベル

十月二十一日ロンドンからまた電報が来た。
マック・スィニは昏睡死を三度繰り返したそうだ。
彼の妹[14]は友人に電報を送ったそうだ。
「コークの市民よ、私の兄のために祈り給え、
彼が一刻早く死に、一刻少なく苦しむよう祈り給え。」
読み終えるに耐えられない、心を傷つけるこの言葉よ、
これを読んで涙を流さない人があろうか。
猛獣のような殺人政府よ、お前は世界史の中にどうしても
永遠に消すことの出来ない汚点を作りたいのか。
鉄のように冷酷なイングランド人よ、お前らの血管の中には
バイロンの血とキャンベルの血はもはや循環していないのか。
暗淡たる光なきお前らの月輪よ、私は望む、
草木の繁茂する我らのこの地球は、この一刹那において
お前らと同じく早々と氷つくがよい。　十月二十四日

その四

真理は自然によって与えられた光を取り戻すだろう、
プロメテウス[15]のように、天の火を持って来るだろう。

——トマス・キャンベル

広大な海は悲壮な哀歌を歌っている。
穹窿無限の晴天は既に顔を赤く泣きはらした、
遠い遠い西方に太陽は沈んでしまった。
悲壮な死よ、金色の光に燦爛と輝く死よ、
凱旋と同じ死よ、勝利の死よ。
兼愛無私の死神よ、有難う、
あなたは私が敬愛し貶すことのない
マック・スウィニを早々と救って下さった。
自由の戦士マック・スィニ、あなたは我ら人類の意志の
権威がこのように偉大であることを示しました。
有難う、私はあなたを賛美する。
「自由」はこれから死ぬことはなくなった。

夜の幕が下りた後の月輪よ、何たる輝きだ。　　十月二十七日

【著者あとがき】

この四節の詩は私の数日間の熱涙の結晶である。各節の冒頭の詩句はスコットランドの詩人トマス・キャンベルが二十二才の時に作った「ポーランドの崩壊」The Downfall of Poland の詩から引用したものである。私はこの詩をバイロンの「ギリシアを痛む」と並読すべきだと思う。バイロンはギリシアの独立を助け、志を遂げずに病死した。キャンベルもまたしばしば義献金を募ってポーランドの独立を援助した。両詩人の義侠心には優劣がない。今日ギリシアは独立（1829）を勝ち取り、ポーランドも既に独立した（1918）が、バイロンもキャンベルも世を去った。しかし西には第二のポーランド、東には第二のギリシアがある。私はバイロンとキャンベルの精神が「自由のために再来すること」を願う。

【訳者あとがき】

この作品は郭沫若がいかにアイルランド独立の闘士スィニに同感し、その運動に関心を寄せていたかを情熱的な詩に託し、自分の世界観を明確に表現したものであり、文学者郭沫若の力量を端的に代表する。末筆ながら、拙訳に目を通して下さり、種々の質問に快くお答え頂いた于亚先生（大手前大学講師）に深謝する。

注

① 本篇初出は上海 1920. 11. 4 日付『時事新報・学灯』。訳詩は人民文学出版社 1982 年出版『郭沫若全集・文学編』第一巻による。

② Terence MacSwiney（1879-1920）　早くから詩と劇作品を多く発表。1913 年コーク義勇軍を創設し、アイルランド独立運動に参加。英政府に幾度逮捕される。20 年 3 月コーク市長の後継者に任じられた。8 月逮捕され投獄されると、絶食を開始し、73 日目に死亡。

③ Sinn Féin　原義「我ら自身」から、広く「アイルランド人のためにアイルランド」を意味し、1920 年 Arthur Griffith（1872-1922）が創設した政党の名。

④ Brixton　イングランド南部の町。

⑤ William Tell　13 世紀オーストリアからスイスの独立を求めた伝説上の人物。

⑥ Bannockburn　スコットランド中部の町。愛国者ブルースはこの地で 1314 年エドワード二世の軍隊を破り、スコットランドの独立を守った。

⑦ Robert Bruce（1201-1295）　スコットランド王 Alexander 三世の後継者と目されていたが、John Balliol によって退けられた。

⑧ Thomas Campbell（1777-1844）　スコットランドの詩人、文学批評家。

⑨ タデウシ・アンジェイ・ボナヴェントゥラ・コチュシコ Tadeusz

Andrzej Bonawentura Kościuszko（1746-1817） ポーランドの愛国者。アメリカ独立戦争に参加、Krakówにおいてロシアの占領軍に反対運動を展開、Warszawaを解放したが、ロシア・プロシア・オーストリア三国の同盟軍に鎮圧されて敗北（1794）。釈放後も独立運動を継続して投獄されスイスで客死。

⑩ Cork アイルランド南部の重要な工業港湾都市。

⑪ 原文「匪持謝東徳」は人名か、不詳。

⑫ 雷首山ともいう。山西省永済県南（他説も）にあるという。

⑬ 伯夷と叔斉とは孤竹君の二子のこと。孤竹国とは商湯時代の伝説上の一属国。商が周に滅ぼされると、叔斉と伯夷は周の粟を食らうことを恥じて首陽山に隠れ、蕨を食って共に餓死したと伝える。

⑭ Annie MacSwiney 生没年不明。姉 Mary と共にコークにアイルランド語のみによる女子学校を設立、アイルランド独立運動に献身。

⑮ Prometheus ギリシア神話の神、土と水から人間を創り、天上の火を人間に与えてゼウスの怒りを買った。

【情報広場】

① 「中国名人展」は六月半ば国士舘大学世田谷キャンパスにて開催予定。日程は次の通。06年6月16日～22日（9:00～17:00）。宋慶齢旧居、魯迅博物館、郭沫若記念館、茅盾旧居、老舎記念館、梅蘭芳記念館などと国士舘大学共催。郭沫若記念館館長郭平英女史が率いる訪日団は来月中旬来日する予定。

② 「郭沫若研究回顧與展望」をテーマとする国際シンポジウムが今年の夏休みの間（詳しい日程は未定）郭沫若の生まれ故郷の四川楽山にて開催予定。主催者：中国現代文学研究会、中国郭沫若研究学会及び四川郭沫若研究学会。企画：楽山人民政府、楽山師範学学院、四川郭沫若研究センター。詳しくは、日本郭研会事務局、または直接四川郭沫若研究センターまでお問い合わせください。後者 E-mail: gmryjzx@126.com

【編集後記】

今号は成家、武、藤田、大高四会員の執筆である。成家さんの「郭沫若の十二支起源研究〔一〕〈子〉」は外字の表記等の技術的な問題で前号の発行に間に合わなかった。以前から企画していた貴重な一編なので、今回あらためてお届けする。プロの印刷屋に任せれば画像がより鮮明に写るかもしれないが、現在のところその余裕がない。皆様のご理解を乞いたい。大高さんの翻訳「勝利の死」は元々寄せてくださった二本の投稿の中の一つだ。もう一つは「矛盾の統一」というすばらしい翻訳だが、版下を組む際、紙幅を大きく超え、慣例の二十ページには収まらぬことに気付いた。悩んだすえ、わたくしの独断で割愛した。次号の掲載となるが、訳者にあらためてお許しいただきたい。（武継平 記）